

太平洋広域漁業調整委員会

第32回太平洋北部会

議事録

令和6年11月18日

水産庁仙台漁業調整事務所

1 開催日時

令和6年11月18日（月）10：33～11：23

2 開催場所

A P市ヶ谷7階 Bルーム（web併用）

3 出席委員

【部会長】

学識経験 北門 利英

【都道府県互選委員】

青森県 竹林 雅史

岩手県 湊 謙

宮城県 關 哲夫

福島県 鈴木 哲二

茨城県 高濱 芳明

千葉県 石井 春人（北部会事務規程に基づく参考人出席）

【農林水産大臣選任委員】

漁業者代表 野崎 太

漁業者代表 小坂田 浩嗣

学識経験 花岡 和佳男

4 議 題

（1）広域魚種の資源管理について

①太平洋北部沖合性カレイ類の資源状況について

②太平洋北部沖合性カレイ類の広域資源管理の取組について

（2）その他

5 議事内容

開 会

○事務局（冠） 皆様、おはようございます。

定刻を少し回りましたが、ただいまから太平洋広域漁業調整委員会第32回太平洋北部会を開催いたします。

本日はお忙しい中、各委員の皆様におかれましては御出席を頂きまして、誠にありがとうございます。

私、水産庁仙台漁業調整事務所長の冠と申します。よろしくお願ひいたします。

初めに、本日の各委員の出席状況について御報告いたします。本日は、道県互選委員でいらっしゃいます釧路十勝海区の川崎委員、福島海区の鈴木哲二委員、大臣選任委員でいらっしゃいます鈴木宏彰委員、長島委員、小玉委員、そして関委員が事情やむを得ず御欠席されております。また、現在、岩手海区の湊委員におかれましては追って御出席いただけると承知しております。

今現在のところ、委員定数14名のうち、定足の過半数を満たす7名の御出席を賜っておりますので、太平洋北部会事務規程第5条第1項の規定に基づき、本部会は成立していることを併せて御報告いたします。

それでは、以後の議事進行を北門部会長にお願いしたく、よろしくお願ひします。

○北門部会長 ありがとうございます。東京海洋大学の北門と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

改めまして、本日は大変お忙しい中、委員の皆様におかれましては、太平洋広域漁業調整委員会第32回太平洋北部会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

本日の部会には、国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所から底魚資源部の成松副部長に御出席を頂いております。誠にありがとうございます。

本日の議題は、「広域魚種の資源管理について」を予定しております。議事の進行につきましては、委員の皆様方の御協力を頂きながら円滑な議事運営に努めてまいりたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

続きまして、都道府県互選委員の交代がございましたので、私の方から御報告させていただきます。

岩手海区の委員でありました大井委員に代わり、令和6年10月1日付けで湊会長が委員として選任されましたので、御紹介いたします。よろしくお願ひいたします。

それでは、議事に入る前に配付資料の確認をお願いいたします。

○事務局（伊藤） 仙台漁業調整事務所の伊藤と申します。本日はよろしくをお願いいたします。

それでは、お配りしている資料について確認させていただきます。

まず、本日の部会の議事次第、委員名簿、出席者名簿、それから本日の議題で使用する資料が資料1、資料2となっています。

以上となりますが、不足等ございましたら事務局までお申し付けください。

ウェブで御出席の方は、マイクをオン又はチャットにて御連絡いただければと思います。よろしいでしょうか。

今回は、会場又はウェブの併用による開催となります。ウェブ出席の委員の皆様方におかれましては、事前に事務局よりお送りしたウェブ会議の進め方に従って、マイクはミュート、消音を基本としていただき、発言する際には先にチャット機能又は挙手ボタンにより意思表示した上で、部会長から合図した後に御発言をお願いいたします。

また、会場にて御出席の委員の皆様方をお願いですが、御発言がウェブ参加者にも伝わるように、必ずマイクを通じて御発言を頂くようお願いいたします。

また、会場出席の委員様方、本日6階にて入試が行われているそうです。トイレは7階でお願いします。

事務局からは以上です。

○北門部会長 ありがとうございます。

続きまして、後日まとめられます本日の部会の議事録について、議事録署名人を選出しおく必要がございます。このことについては北部会の事務規程第11条により、部会長から御指名させていただきたいと思っております。

海区互選委員からは宮城県の關委員、大臣選任委員からは野崎委員、以上のお二方に本日の部会の議事録署名人をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○關委員 關です。了解いたしました。

○北門部会長 ありがとうございます。

野崎委員もよろしくお願いいたします。

○野崎委員 野崎です。了解いたしました。よろしくお願いいたします。

○北門部会長 ありがとうございます。

それでは、議題に進んでまいりたいと思っております。議題（1）の「広域魚種の資源状況に

ついて」に入ります。

本部会では、資源回復計画以降、引き続き、太平洋北部沖合性カレイ類の資源状況と広域資源管理の取組について検討をしてきたところでございます。

まずは、太平洋北部沖合性カレイ類の資源状況について、水産資源研究所の成松副部長に御説明をお願いしたいと思います。

次に、太平洋北部沖合性カレイ類の広域資源管理の取組について、事務局より御説明いただきます。

質疑につきましては、それぞれの説明が終わった後に一括してお受けいたしたいと思います。

また、太平洋北部沖合性カレイ類の広域資源管理では、千葉県の沖底漁業者においても同じ対象魚種が漁獲されているため、太平洋南部会の千葉海区互選委員であります石井委員に北部会の事務規程第8条第2項に基づく参考人として御出席を頂き、他の委員の方と同様に御意見を頂きたいと思っております。

それでは、委員の皆様方におかれましては、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、資源の状況について、まずは水産資源研究所の成松副部長から御説明をよろしくお願いいたします。

○成松底魚資源部副部長 御紹介にあずかりました水産研究・教育機構水産資源研究所の成松と申します。よろしくお願いいたします。

私からは、太平洋北部沖合性カレイ類の資源状況について御説明いたします。

なお、タイトルとしましては「沖合性カレイ類」というような形になっておりますけれども、具体的にはサメガレイ、ヤナギムシガレイのカレイ類2種に加えまして、キチジ、キアンコウが対象ということで、カレイ類2種とカレイ類ではない魚種2種が対象ということになっております。

それでは、まずサメガレイ（太平洋北部）について御説明いたします。

サメガレイは、北日本の太平洋岸に分布しておりまして、ここでは青森県の沖合から千葉県の沖合に分布する群れを太平洋北部として対象としております。

1枚目の図2、左下の図になりますけれども、ここに漁獲量の推移を示しております。漁獲量は1970年代に最も多く、その後1990年代にかけて大きく減少しました。1990年代後半以降は100トンから300トンの漁獲量で推移しております。

図3ですけれども、資源量指標値の推移を示しておりまして、沖合底びき網漁業の標準

化CPU Eを資源量指標値としております。その指標値も1970年代から80年代に高く、それから1990年代にかけて減少しまして、その後は横ばいで推移しております。

なお、最近5年間としましては減少傾向にあるといったような状況となっております。

次のページに移りまして、右下に2と書いてあるスライドになりますけれども、左の図、図4ですけれども、これは資源量指標値の累積正規分布から求めた管理基準値案を示しております。ここでは全体の80%に相当する値を目標管理基準値案としておりまして、この図の中の緑の破線がそれに相当いたします。直近年の2023年の資源水準は21.7%水準に相当いたしますので、現在の資源水準は目標管理基準値案を下回っているということになります。

また、右の図5では、資源水準と、その水準に応じて漁獲量を増減させる係数の関係を示しておりまして、資源水準が21.7%ですと漁獲量を増減させる係数は、この赤い丸で示しました0.51ということになります。

次のページに移りまして、3枚目のスライドになります。

左の図6ですけれども、これは近年の漁獲量の推移を示しておりまして、直近5年間の1年当たりの平均漁獲量は193トンということになっております。この漁獲量の平均値に先ほど求めました資源水準に応じて漁獲量を増減させる係数、これは0.51という数字になりますけれども、その値を乗じて算定漁獲量を求めますと、2025年の算定漁獲量が100トンということになります。

次のページに移りまして、続いてヤナギムシガレイになります。

ヤナギムシガレイは太平洋南部以南に広く分布しておりまして、ここでは青森県の太平洋岸から千葉県の上総に分布する群れを対象としております。

左下の図2ですけれども、これは漁獲量の推移を示しておりまして、近年では2011年に起きました東日本大震災の後に漁獲量は大きく落ち込みましたけれども、その後回復しまして、2016年以降は比較的小規模な変動で推移しております。

それから右の図3ですけれども、これは漁獲物全体の年齢別漁獲尾数を示しておりまして、市場の漁獲量データですとか、それから体長組成のデータ、それから研究室の方で求めました年齢査定の結果から推定した値ということになります。

次のページに移りまして、図4です。これは年齢別資源尾数を示しておりまして、コホート解析から求めた結果ということになります。

それから、右の図5は年齢別資源量と親魚量の推移を示しております。資源量は東日本

大震災の後に減少しましたが、2017年にかけて増加しまして、その後は横ばいで推移しております。

また、この折れ線グラフで示しました親魚量ですけれども、親魚量は近年、増加傾向にあるといったような状況となっております。

続いて6枚目になります。左の図6は再生産関係を示しております、横軸に親魚量、縦軸にその親から生まれた1歳魚の尾数を示しております。この関係をホッカー・スティック型の再生産関係式に当てはめられております。

それから、右の図7ですけれども、これは平均親魚量と平均漁獲量の関係を示しております。漁獲量が最も高くなる場所、そこがMSYということになりまして、そのMSYを達成する親魚量を目標管理基準値案というような形にしております。また、MSYの60%の漁獲量を達成するときの親魚量を限界管理基準値案、MSYの10%の漁獲量となる時の親魚量を禁漁水準案としております。具体的な数字としましては、MSYの値は197トンで、目標管理基準値案となる親魚量は758トンということになっております。

次のスライドに移ります。図8には神戸プロットというものを示しております、これはこれまでの親魚量や漁獲圧が目標となる親魚量や漁獲圧に対しましてどのようなレベルだったのかということを示しております。過去の経緯を見ますと、2000年から2010年には左上の、いわゆるレッドゾーンというところにありまして、つまり親魚量は目標よりも少なく、漁獲圧も目標よりも高い状態にあった。つまり、資源としては余り良くない状態にあったということが分かります。ですけれども、その後、漁獲圧の減少とともに親魚量が増加しまして、近年は右下のグリーンゾーン、つまり親魚量は目標よりも多くて、漁獲圧も目標よりも低いという、資源にとっては良い状況になっているという状況にあります。

それから、右の図、これは漁獲管理規則案を示しております、上の図は親魚量と漁獲圧の関係を示しております。親魚量が禁漁水準から限界管理基準値案にあるときには、親魚量の増加に伴いまして漁獲圧を段階的に上げていくということになっておりまして、親魚量が限界管理基準値案を上回ったときには漁獲圧を一定にするというような案となっております。

ただし、不確実性も考慮しまして、漁獲圧の上限は F_{msy} ではなくて、それに調整係数0.8を乗じたものを上限というものを推奨しております。

次のスライドで8枚目になります。図10と図11には、そういった管理規則案に基づいて

漁獲した場合と現在の漁獲圧で漁獲した場合の親魚量と漁獲圧の将来予測を示しております。どちらもおおむね似たような変動をするような傾向にありますけれども、現在の漁獲圧で漁獲した方が若干親魚量は少なく、漁獲量は多くなる傾向にあるというような結果が示されております。

次をお願いします。

9 ページ目の表、これも将来予測の結果を示しております、調整係数 β を変化させたときの親魚量と漁獲量の変化を示しております。 β を0.8としますと、10年後の2035年に目標管理基準値案となる親魚量を上回る確率が55%となるということから、 β は0.8を推奨しております、 β を0.8としたときの2022年の平均漁獲量、これは下の表2の方に示されておりますけれども、ここが212トンということになります。

続いて、キチジになります。

次をお願いします。

キチジは北日本の太平洋岸からオホーツク海に分布している深海性の魚種でして、ここでは青森県の沖合から千葉県の上総に分布する群れを太平洋北部として対象としております。

次をお願いします。

12ページ目の図では、漁獲量の推移を示しております。漁獲量は1970年代に多く、当時は3,000トンを上回るような年もありましたけれども、その後、1990年代後半にかけて減少しまして、さらに、それ以降は200トンから600トンぐらいの漁獲量で横ばいで推移しております。

次をお願いします。

続きまして13ページ目の図ですけれども、この図ではキチジの有漁網数を示しております、尻屋崎から岩手沖のかけ廻しでは1980年代の後半から網数が減少しております。金華山から房総のトロールでは、東日本大震災以降に網数が減少しているということになっております。

次をお願いします。

14ページ目の図では資源評価の流れを示しております、この資源ではトロール調査結果を使って資源量を推定しております、その資源量の結果から水準や動向を判断し、ABCの算定を行っております。

次をお願いします。

15ページ目の図ですけれども、これは私どもが行っておりますトロール調査から推定した資源量の推移を示しております。ちょうど漁獲量が少なくなった1990年代後半からの結果になりますけれども、その時期からで見えますと、長期的に資源量は増加しております、2015年以降は増減を繰り返しているということになっています。

また、最近5年間で見えますと減少傾向となっております。このことから、現在の資源は水準としましては高位水準、動向としましては減少傾向というふうに判断しております。

次をお願いします。これは1枚飛ばしていただきまして、続きまして資源評価のまとめになります。

先ほども御説明しましたけれども、資源量はトロール調査による直接推定法によって求めておりまして、資源水準は高位水準、動向としましては減少と判断しております。

2025年のABCですけれども、資源量結果に基づきまして、管理基準値をF40%SPRというものにしております。これは全く漁獲をしなかったときと比べて40%の親魚を残すという漁獲圧による漁獲方策になりまして、2025年のABC limitは450トン、ABC targetは360トンと推定されております。

続きまして、キアンコウになります。

キアンコウも青森県の沖合から千葉県の上総半島の太平洋岸に分布する群れを太平洋北部として対象としております。

沿岸性の種であるということもありまして、青森県の沖合と宮城県から千葉県までの沖合が主な漁場となっております、その海域を分けて評価を行っております。

次をお願いします。

20ページ目の図、これは漁獲の動向を示しております。これを見ますと、2000年から2010年にかけては比較的安定しておりました。その後、東日本大震災がありまして、東日本大震災以降は減少しましたが、その後は増加しまして、2021年以降は震災前と同じレベルの漁獲量にまで回復しているということになっています。

県別で見ますと、近年は青森県、宮城県、それから福島県による漁獲が多いといったような傾向があります。

次をお願いします。

続いて、沖合底びき網漁業の網数の推移をこの図は示しております、1990年代から2000年にかけて網数が多く、東日本大震災以降は減少しまして、その後、若干回復しまし

て、現在は安定しているということになっています。

現在の網数としましては、震災の前の大体3分の2ぐらいの網数で安定しているということになっております。

次をお願いします。

続きまして資源評価の流れですけれども、この資源では資源量が推定されていないということもありまして、漁獲量と資源量指標値を用いてABCの算定を行っております。

次をお願いします。

23ページ目の図では、尻屋崎から襟裳西海区の沖合底びき網漁業の標準化CPU Eの推移を示しております。近年は中位水準と判断できる水準に収まる年が多く見られておりまして、直近年の2023年の資源も、水準としては中位と判断できる水準にありまして、動向は横ばいであると判断しております。

次をお願いします。

続きまして、こちらの図では、金華山から房総海区のオッターロールの沖合底びき網漁業の標準化CPU Eの推移を示しております。近年、標準化CPU Eの値、かなり高い値で推移しておりまして、このことから現在の水準としましては高位水準、動向としましては横ばい傾向であると判断しております。

次をお願いします。

この25ページ目は、資源評価のまとめになります。海域で水準と動向は異なりますけれども、漁獲量の多い金華山から房総海区の結果を重視しまして、全体としましては水準は高位、動向としては横ばいとしております。

また、ABCの算定ですけれども、2023年の漁獲量をベースとしまして、その漁獲量に資源水準から推奨される係数と、最近3年間の資源量指標値の推移から算定される係数、その二つの係数を乗じて求めております。その計算ですけれども、青森から岩手沖と宮城から千葉沖とで分けて行っておりまして、ABCはそれらを合わせた数字としております。そうしますと、2025年のABC limitは1,080トン、ABC targetは860トンと算出されております。

沖合性カレイ類の資源状況に関する説明は以上となります。

○北門部会長 成松副部長、どうもありがとうございました。

それでは続きまして、事務局より資源管理の取組について御説明をお願いいたします。

○事務局（伊藤） 仙台漁業調整事務所の伊藤と申します。

それでは、私の方から太平洋北部沖合性カレイ類の広域資源管理の取組について御説明いたします。資料2を御覧ください。

それでは、本取組について御説明します。

本取組につきましては平成15年からの取組で、当時、広域漁業調整委員会の調整の下、資源回復計画として策定され、平成24年からは資源管理指針、資源管理計画の下で実施、令和6年以降は資源管理方針、資源管理協定に移行し、関係する各漁業において実施されているものになります。

1 ページ目を御覧ください。

対象魚種となっているサメガレイ、ヤナギムシガレイ、キチジ、キアンコウの4魚種について整理した資料となっています。こちらにつきましては、水産研究・教育機構が公表しております令和6年度資源評価によるものであり、先ほど成松副部長からの御説明の中にもあり、繰り返しの説明となってしまいますが、この4魚種の資源の現状について整理したものです。

まずサメガレイですが、サメガレイの資源量水準については、2023年では21.7%と低位になっています。また、2025年の算定漁獲量についても、2023年の漁獲量を下回る予測となっています。

続いてヤナギムシガレイですが、目標管理基準値案は758トンであり、2023年の親魚量の方が上回っております。

続いてキチジですが、資源水準は高位、資源動向は減少となっております。

最後にキアンコウですが、資源水準は高位、資源動向は横ばいといった結果になります。

次のページをお願いします。

続いて、2 ページ目を御覧ください。対象4魚種の漁獲量について、本取組を開始した平成15年からの推移を記載しています。最も漁獲量が多いのがキアンコウで、次にキチジ、そしてサメガレイとヤナギムシガレイが同程度で続いています。特にキアンコウについては、ここ数年増加傾向にあります。また、その他の魚種については年ごとに多少の増減はありますが、おおむね横ばいといった状況です。

次のページをお願いします。

続いて、3 ページ目を御覧ください。本取組に関係する漁業種類を整理した表になります。平成24年以降は関係する漁業の資源管理計画、令和6年以降は資源管理協定に位置付

け、この取組を実施してきておりますが、青森県から千葉県までの沖合底びき網漁業及び青森県、福島県、茨城県の小型機船底びき網漁業がこの取組に参加しています。

次をお願いします。

続いて、4ページ目を御覧ください。こちらは参考資料ということで、先ほどの関係漁業種類に係る許可隻数の推移をまとめたものになります。青い線が小型機船底びき網漁業の許可隻数、オレンジの線が沖合底びき網漁業の許可隻数となっております。どちらも減少傾向にあります。

次をお願いします。

続いて、5ページ目を御覧ください。資源管理の方向性を整理しているスライドとなります。

サメガレイについては2023年の資源量水準は21.7%と低位であり、2025年算定漁獲量についても2023年を下回る予測となっていることや、数量管理の導入に向けた議論を踏まえ、保護区の実施を継続して産卵期や索餌期の産卵親魚の保護を図りつつ、資源量水準を上向きに転じさせる方策について検討を進めることとしています。

ヤナギムシガレイについては2023年の親魚量は目標管理基準値案を上回る量となっていることや、数量管理の導入に向けた議論を踏まえつつ、現在実施している自主的管理措置等の取組を継続することとしています。

キチジ及びキアンコウについては、それぞれ資源水準が高位に位置しており、順調に資源が回復してきているところですが、このような資源水準を維持するため、現在実施している自主的管理措置等の取組を継承するというように整理しています。

次をお願いします。

続いて、6ページ目を御覧ください。こちらは、資源管理措置の内容を記載しています。

表の右端に記載の各漁業において、保護区、休漁、漁具の制限の措置が記載のとおり取り組まれてきています。御承知のとおり、資源管理計画から資源管理協定の方に移行しておりまして、対象とする資源は地域の重要水産資源とされています。そのため、協定の記載からは落ちてしまっているものの、実際には実行している取組というものがあります。表の中で青字で記載しているものがそれに当たりまして、欄外に注意書きしております。

次をお願いします。

7ページ目を御覧ください。こちらが先ほど御説明した太平洋北部沖合性カレイ類の保護区の位置図になります。上の方から順番に、保護区のIから保護区のVIまでを設定して

おり、継続して行っております。

次をお願いします。

続いて、8ページ目を御覧ください。こちらの資料につきましては、関係者による連携を図るための体制について整理した資料になっております。広域的な資源管理に関する事項については、単独の知事管理漁業などと比べ関係者の範囲が広く、特にその連携を図っていくことは重要であると考えております。

当事務所の具体的な取組として、例年、底びき網漁業者と意見交換会を開催しており、また広域漁業調整委員会の開催前には行政・研究担当者会議というものを開催しているところです。

こうした太平洋北部海域の資源状況や漁獲状況についての情報交換によって問題認識等を共有して、適切な資源管理の推進につなげてまいりたいと考えております。

次をお願いします。

最後に9ページ目を御覧ください。参考としまして、当事務所において今年度で開催した意見交換会等の開催状況を載せております。

私からの説明は以上です。

○北門部会長 御説明ありがとうございます。

それでは、次に質疑に移りたいんですけども、その前に冠所長の方から出席者に関する情報アップデートがありますので、お願いいたします。

○事務局（冠） 事務局の冠でございます。

冒頭御紹介申し上げました岩手の湊委員、先ほどからウェブにて参加を頂いております。したがって、本日の各委員の御出席は8名が頂いておりますことをこの場を借りて御報告いたします。湊委員、引き続きよろしくお願いいたします。

事務局からは、以上でございます。

○北門部会長 ありがとうございます。

それでは、それぞれの資源状況、資源管理の取組状況について御説明がありましたところですが、ここまでのところで御質問等がありましたら承りたいと思います。いかがでしょうか。

ウェブの皆さんもいかがでしょうか。

成松副部長の方から4種についての説明がありまして、サメガレイについては2系の適用、それからヤナギムシガレイにつきましては1系の適用ということで、MSY等の水準

の情報は資料等に記載のとおりです。

それからキチジ、それからキアンコウにつきましては動向調査でそれぞれ資源量が、キチジの場合にはトロール調査によって資源量が得られていて、キアンコウの場合にはC P U Eの動向を用いて、それぞれA B Cの算定がされているところであります。

御質問等いかがでしょうか。

もしないようでしたら、成松副部長、確認なんですけれども、画面に映してもらった方がいいですか。6枚目です。左上に親魚量と加入量の間接関係がありまして、加入はちょっと残念なことになっているんですけれども、22から23年に対しては親魚量が比較的増加している。

次のページに神戸チャートがありまして、ここでもM S Yに対する親魚量の比が示されていますが、22年から23年については余り増加していないように見え、少し印象が違っている感じがしています。22年は800トンぐらいなんでM S Y水準よりちょっと上ぐらいですけれども、この神戸チャートを見るとかなり1を上回っている形になっていて、もしかしたら2022年の表現については確認が必要じゃないかなというふうに思ったんですけれども、いかがですか。目の錯覚なのかもしれません。

○成松底魚資源部副部長 御質問ありがとうございます。確かに親魚量としましては2020、21、22ですか、ほとんど同じような数字にある中で、神戸チャートとしては、少々お待ちください。

○北門部会長 22の表示がおかしいんですかね。今成松副部長がおっしゃったように、20、21、22って余り親魚量は変わっていないところに、22だけちょっと右の方にずれていて、22と23だと親魚量増加しているはずなんですけれども、この神戸チャート上だと余り増加していないように見えるので、22の表示の位置がちょっとおかしいのかなというふうに思えました。後ほどといいますか、会議後でも構いませんので御確認いただければなというふうに思います。

○成松底魚資源部副部長 了解しました。もう一つの可能性としましては、ここでの2023という数字が同じ年を取っているかということも含めて、ちょっと確認したいと思います。こちらの図6の方ではプロットが打たれているということなので、2022年の親魚量と2023年の加入との関係だと思いますが、もしかすると図8の神戸チャートの方では2023年の親魚を取っているというような形で、表記が1年ほど図6と図8でずれている可能性も含めて、少し確認したいと思います。

○北門部会長 再生産関係の方はラベルが打ってある年号のラベルは、加入に対してということですかね。私の方が混乱しているだけかもしれませんが、御確認いただければというふうに思います。

あと、ついでになんですが、23年の加入量が著しく低い理由なんですけれども、恐らく環境等の関係だとは思いますが、もし科学的な知見があったら少し教えて頂きたいのと、それからこれも2023年のヤナギムシガレイの資源評価書との比較でちょっと気になったんですけれども、親魚量自体が150トンから200トンぐらい、前年の資源評価と比べて低めになっているんですが、これはVPAの癖といいますか、最近年の資源量が変化しやすい形というのが理由なのかなと思うんですけれども、もし御検討いただければ教えていただければと思います。

○成松底魚資源部副部長 最初の質問なんですけれども、2023年の加入が少ないということなんですけれども、近年、若齢の魚が——1歳魚ですね。1歳魚の漁獲量が非常に少なくなってきておりまして、それは少し環境の影響もあって成長が悪くなっていて漁獲が少なくなってきている。漁業者の方も余り小型のヤナギムシガレイを獲らないような形になっておりますので、直近年の1歳魚の尾数が非常に少なく見積もられているということで、このようなプロットになってしまっているというふうに考えております。

ですので、もう一年、もう二年、データが積み重なると、もう少し加入の値が多くなっていくというふうには考えております。

一つ目は、それでよろしいでしょうか。

○北門部会長 いることはいるけれども、数字として反映されていないということですか。

○成松底魚資源部副部長 そうですね。年齢別漁獲尾数として数字がすごく低い数字になっているために、ここの値としては非常に少ない値になってしまっているというふうに考えております。

○北門部会長 それは小型魚の選択性とかをうまく取り入れていけば、実は補正ができる数字なんですか。そうでもない。

○成松底魚資源部副部長 そうですね。この傾向がずっと続けばできるかもしれないんですけれども、ここ2年ぐらいにかけてそういう傾向が見られておりまして、例えば去年の評価報告書でも最新年のデータとしては下の方にプロットされておりまして、それが1年加わることで、再生産の曲線よりも下にはあるんですけれども、それでも少し上の方に来ておりますので、最近の漁獲の傾向、それが反映されてこのような形になっているという

ふうと考えております。

○北門部会長 ちょっとしつこくて申し訳ないんですけども、そうしたら実態の加入量とはちょっと違うということですね。

○成松底魚資源部副部長 はい。

○北門部会長 そうすると、これたくさん年数のデータがあるんで、1年分のデータというのは余り影響を及ぼさないと思うんですけども、逆に最近年のデータは再生産関係の推定には使わない方が実は安全だということですか。

○成松底魚資源部副部長 そういう状況なので、非常に低いプロットから将来予測を行うと、今後の将来予測の結果にも反映されます。すごく影響を与えますので、今年度から資源評価、将来予測においてはこの加入の値を使わずに、再生産関係から推定した加入量を推定して、将来予測にはそのような形で使っております。

○北門部会長 将来予測のシミュレーション、 β を決めるところですね。分かりました。

ただ、そのフィッティング、ホッケー・スティック型の再生産関係を推定するときには2023年を使わない方がいいんじゃないかなというふうに思ったんですけども。

○成松底魚資源部副部長 この再生産関係は3年前に行ったものを使っておりまして、今後見直しする際にでも、このプロットを使ってしまうと実態に合ったような結果にはならないというふうに思っておりますので、今後、再生産関係を決めたりするときには直近年のデータは使わない方向でということは検討しております。

○北門部会長 ありがとうございます。そうですね。5年に1回更新ですね。失礼しました。ありがとうございます。

○成松底魚資源部副部長 ごめんなさい、二つ目の質問を。

○北門部会長 去年の資源評価書をちょっと見ていたんですけども、全体的に親魚量が少なめに今年見積もられているなという印象があったんですけども、もし何かお気づきな点があれば教えてほしいなと思ったんですけども。多分成松さんも去年の資料が、今手元にないかと思うんで、すぐに確認できないかと思うんですけども、全体的に小さめになっているなという気がしたので、もしその辺りの理由が分かればなというふうに思ったんですが。

去年の評価書の神戸チャートを見ると、2022年で1.5ぐらいにはなっているんです。今年だと1.2から1.3ぐらいの間なんで、ちょっと低めになっているのが、もし理由が把握できていればお伺いしたいなと思いました。これも、もし分かりましたら、後日でも構いま

せんのでお教えいただければと思います。

○成松底魚資源部副部長 すみません、今お答えできるような材料がありませんので、また改めてお知らせいたします。

○北門部会長 私も事前に資料を確認して、気が付けば事前にお知らせできたところ、申し訳なかったと思います。

それでは、ほかに皆さんの方から御質問等ございませんでしょうか。

ウェブ参加の方々もいかがでしょうか。特段よろしいでしょうか。

もしございませんようでしたら、事務局から報告があるようですので、お願いしたいと思います。

○事務局（伊藤） 仙台漁業調整事務所の伊藤です。

例年、この北部会では「マダラ陸奥湾産卵群の資源管理の取組について」を議題に入れ、事務局から報告してきたところでした。これまで青森県の陸奥湾産卵群の資源管理として、青森県陸奥湾地区の小型定置網漁業及び底建網漁業と沖合底びき網漁業の青森県太平洋地区が取組を行ってきましたが、今年度から開始されたマダラのT A C管理の系群分けに当たりまして、青森県陸奥湾地区はまだら北海道太平洋、沖合底びき網漁業の青森県太平洋地区はまだら本州太平洋北部系群に区分されたため、今後はそれぞれの対象資源の区分に応じた取組として各資源管理協定の取組に位置付け、太平洋北部会の対象から除外することとなりました。

なお、このことについては、10月31日に開催した行政・研究担当者会議においてこちらから提起し、各道県から了解を得ているところです。

事務局からは以上です。

○北門部会長 ありがとうございます。

ただいまの件につきまして、もし御確認等、質問ございましたら承りたいと思いますが、いかがでしょうか。特段よろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、次の議題に移りたいと思います。

その他の議題としましては特段用意がありませんが、せっかくの機会ですので、皆様方から何か御意見等ございましたら御発言を頂きたいなというふうに思いますが、いかがでしょうか。

特段、皆様の方から御質問、あるいは御意見等ございませんようですので、本日の議題、これで全て終了したいというふうに思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、引き続き、次回の委員会の開催予定について事務局より御説明をお願いしたいと思います。

○事務局（冠） 事務局でございます。

本部会の開催につきましては、今回は令和7年の秋を予定しております。具体的な日時と場所に関しましては、その開催見込みの時期が近付きましたら、部会長並びに各委員の皆様のご都合を伺いつつ決めていくこととなります。よろしくお願いいたします。

なお、委員会の議題が例えば報告のみとなる場合につきましては、令和5年の秋の前例に倣いまして開催を省略することも一案かと考えてございます。今後、各委員の皆様の御意見等々を伺いながら、事務局で提案と決定をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

○北門部会長 ありがとうございます。開催に際しましては、皆様、引き続き御出席くださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、本日の部会はこれで閉会したいと思います。委員各位、御臨席の皆様におかれましては議事進行への御協力及び貴重な御意見を頂き、ありがとうございました。

なお、議事録署名人として指名をさせていただきました海区互選委員の關委員と大臣選任委員の野崎委員のお二方には、後日、事務局から本日の議事録が送付されますので、御署名をよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、太平洋広域漁業調整委員会第32回太平洋北部会を閉会いたします。どうもありがとうございました。

閉 会